

解離性同一性障害の苦痛の日々を垣間見て

先日、解離性同一性障害（Dissociative Identity Disorder；略称 D I D、いわゆる多重人格障害）の母親に寄り添う家族の長期に渡る取材のドキュメンタリ - が放送された。

ご主人は妻に症状が現れると、その会話内容を録音、メモして妻の痛ましい生活史を何とか知ること（記憶の断片を取り戻す）からも寄り添い続けようとしている。その記録の整理から、妻は27人の人格をもち、その中で5人が主に現れるという。

D I Dは、幼い時の虐待等によるおぞましい記憶の苦痛を拒否するために、他の人格に背負わせて記憶を封印しようとする症状のよう。それ故に、当人は記憶の闇に入り、生きてきた過去の記憶が寸断されているとか。それだけに、治癒経過は、今の人格に寸断された記憶を呼び戻す作業ともいえるよう。つまり、別人格と今の人格を統合する作業（忘れない、思い出したくない心の傷を自分で受けとめる作業）のよう。

しかし、別人格で封印していた一つ一つの記憶の断片を埋めて行く（心の闇を自覚しようとする）この作業は、新たな心身の苦痛（嘔気、嘔吐、頭痛、腹痛、等々）を伴い、本来の自分を取り戻すための葛藤の日々とか。

（注：番組を見ての私なりのD I Dの理解ですので、理解不足かも知れませんが、成書を参照下さい。）

ご主人は、妻の病名が解ってからは、仕事を辞め、妻の治癒を信じて安心感を与えるように寄り添う日々を選んだ。三人の子どもは働いた給与を少しずつ家計に充て、子どもなりに母に寄り添っている。しかし、虐待の連鎖もあり、長女は「自分の母であっても、何度も殺意を抱いた。」という。

治癒へは、心の闇からの解放 = 他人を洞察する言動が見えて来るといふ。この母親も、おぞましい過去を受けとめつつあり、「自分のように苦痛の日々の人が他にもいるはず。自分のように治る人もいることを教えるために、今こうして（取材）カメラが家にいるだ。そうなんだ。」と本人なりに納得しようとし、自分の存在、役割を他の人との関係中で意味づける言動も見え出している。

この経過にセラピストも驚いていたが、やはり、今のありのままの妻を受けとめ、妻が

信頼できる、安心できるご主人のような寄り添う存在が、こうした障害の治癒には不可欠という。やはり、病にある、なしに拘わらず、いずれの人間関係においても、「心の居場所」という視点がまずは大事ということか。

また、この症例のように、忌まわし、辛い、苦痛を伴う体験を結局自らに閉じこめ続けることが出来ずに、多重人格を借りて表出し、更に心の閉じこめに堪えきれずに身体が苦痛を伴う症状として現れてくることから推考して、やはり人間は本質的に、どんなに辛いことでも発信しないと身体が持たないような仕組みに出来ているのではないかとも思える。

追伸：

人は自分の気持ちを伝え切れないが故に、言葉を持ったという見解もある。そのための言葉だから、どんどん使っちゃべらなくはね。

私は、人とは最初は解り合えないことが前提だからこそ、会話をしなくちゃあと思っている。

それを「自分はコミュニケーション下手だから……」とか、「話しても解ってもらえないから…」と人と語り合うことを避けがちな人がいるが、逆ですよ。下手と思うなら、なお話さないかね。

そして、諦めずに語り合い続けていれば、いつか理解し合えると、人を信じ、自分を信じないとね。

私はコミュニケーション下手かなと思うからこそ、一生懸命しゃべり、HP上でも発信し続けている(*^_^*)、人を信じて……。

(2005年9月1日 記)